

## 第4講

### 本当はみんな知っていたんだ ー幕末の琉球王国と日中仏の思惑ー (2006年度第3問)

次の文章(1)・(2)は、1846年にフランス海軍提督が琉球王府に通商条約締結を求めたときの往復文書の要約である。これらを読み、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) [海軍提督の申し入れ] 北山と南山の王国を中山に併合した尚巴志と、貿易の発展に寄与した尚真との、両王の栄光の時代を思い出されたい。貴国の船はコーチシナ(現在のベトナム)や朝鮮、マラッカでもその姿が見かけられた。あのすばらしい時代はどうなったのか。
- (2) [琉球王府の返事] 当国は小さく、穀物や産物も少ないのです。先の明王朝から現在まで、中国の冊封国となり、代々王位を与えられ属国としての義務を果たしていません。福建に朝貢に行くときに、必需品のほかに絹などを買い求めます。朝貢品や中国で売るための輸出品は、当国に隣接している日本のトカラ島で買う以外に入手することはできません。その他に米、薪、鉄鍋、綿、茶などがトカラ島の商人によって日本から運ばれ、当国の黒砂糖、酒、それから福建からの商品と交換されています。もし、貴国と友好通商関係を結べば、トカラ島の商人たちは、日本の法律によって来ることが禁じられます。すると朝貢品を納められず、当国は存続できないのです。

フォルガード『幕末日仏交流記』

### 設問

- A 15世紀に琉球が、海外貿易に積極的に乗り出したのはなぜか。中国との関係をふまえて、2行(60字)以内で説明しなさい。
- B トカラ島は実在の「吐噶喇列島」とは別の、架空の島である。こうした架空の話により、琉球王府が隠そうとした国際関係はどのようなものであったか。歴史的経緯を含めて、4行(120字)以内で説明しなさい。

P2, 3 のシートは、ほぼノーヒントです。ヒントが書き込まれているシートは P4, 5 にあります。

解いてみましょう (第 4 講) A について

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア (ア) に (イ) が (ウ)

理由を書く。

イ (エ) 書く。

ウ 2 行 (60 字) 以内で書く。

2 資料と教科書 (山川出版社『詳説日本史 B』) の内容とを照らし合わせる。  
関係する教科書のページと内容は、

教科書の



教科書の



3 与えられた資料をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページの「東大チャート」には、関係する教科書のページと行のみ記されています。

東大チャート「15世紀に琉球が、海外貿易に積極的に乗り出した理由」(2006年度第3問設問A)

(へ、抜き出して入れる)

【教科書の記述】

(PP. 127. L20~128. L1 及び注①)

(2) 当国は小さく、穀物や産物も少ないのです。先の明王朝から現在まで、中国の冊封国となり、代々王位を与えられ属国としての義務を果たしています。

15世紀の①は②を受けた国王による③以外は認めない④をとっていった。そのため⑤人商人は貿易に携わることができなかった。

その状況の中で、①の②を受けた琉球は、①の④のもと東アジア諸国間の⑥で⑦することができた。

【教科書の記述】

(PP129. L11~130. L5)

抜き出したものをまとめる

①の②を受けた琉球は、①の④によって貿易に携わることができない⑤人商人に代わって、⑥で⑦することができた。



4 60字に要約する。

ここ (P4, 5) からは、ヒントが書き込まれているシートです。

解いてみましょう (第4講) Aについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア (ア) 15世紀 に (イ) 琉球 が (ウ) 海外貿易に積極的に乗り出した

理由を書く。

イ (イ) 中国との関係をふまえて 書く。

ウ 2行 (60字) 以内で書く。

2 資料と教科書 (山川出版社『詳説日本史B』) の内容とを照らし合わせる。  
関係する教科書のページと内容は、

教科書の 127 ページの 20 行目～128 ページの 1 行目 及び注①



明を中心とする国際秩序の中でおこなわれた日明貿易は、国王が明の皇帝へ朝貢し、その返礼として品物を受けとるという形式をとらなければならなかった(朝貢貿易)①。  
注①：明は、倭寇対策として国王以外には貿易を認めない方針(海禁政策)をとった

教科書の 129 ページの 11 行目～130 ページの 5 行目



琉球では、北山・中山・南山の3地方勢力(三山)が成立して争っていたが、1429(永享元年)、中山王の尚巴志が三山を統一し、琉球王国をつくり上げた。琉球は明や日本などと国交を結ぶとともに、海外貿易をさかんにおこなった。琉球船は、南方のジャワ島・スマトラ島・インドシナ半島などにまでその行動範囲を広げ、明の海禁政策のもと、東アジア諸国間の中継貿易に活躍したので、王国の都首里の外港である那覇は重要な国際港となり、琉球王国は繁栄した。

3 与えられた資料をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の空欄に当てはまる語句も記されています。

東大チャート「15世紀に琉球が、海外貿易に積極的に乗り出した理由」(2006年度第3問設問A)

(へ、抜き出して入れる)

【教科書の記述】

明を中心とする国際秩序の中でおこなわれた日明貿易は、国王が明の皇帝へ朝貢し、その返礼として品物を受けるという形式をとらなければならなかった(朝貢貿易)①。

注①：明は、倭寇対策として国王以外には貿易を認めない方針(海禁政策)をとった  
(PP. 127. L20~128. L1 及び注①)

(2) 当国は小さく、穀物や産物も少ないのです。先の明王朝から現在まで、中国の冊封国となり、代々王位を与えられ属国としての義務を果たしています。

15世紀の①は②を受けた国

王による③以外は認めない

④をとっていった。そのため⑤

人商人は貿易に携わることができなかった。

その状況の中で、①の②を受

けた琉球は、①の④のもと

東アジア諸国間の⑥で⑦

することができた。

【教科書の記述】

琉球では、北山・中山・南山の3地方勢力(三山)が成立して争っていたが、1429(永享元年)、中山王の尚巴志が三山を統一し、琉球王国をつくり上げた。琉球は明や日本などと国交を結ぶとともに、海外貿易をさかんにおこなった。琉球船は、南方のジャワ島・スマトラ島・インドシナ半島などにまでその行動範囲を広げ、明の海禁政策のもと、東アジア諸国間の中継貿易に活躍したので、王国の都首里の外港である那覇は重要な国際港となり、琉球王国は繁栄した。(PP129. L11~130. L5)

抜き出したものをまとめる

①の②を受けた琉球は、①の④によって貿易に携わることができない⑤人商人に代わって、⑥で⑦することができた。



4 60字に要約する。

P6,7のシートは、ほぼノーヒントです。ヒントが書き込まれているシートはP8,9にあります。

解いてみましょう（第4講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 江戸時代末期に  について書く。

イ  を含めて書く。

ウ 4行（120字）以内で書く。

2 教科書から、江戸時代末期までの琉球王国と日本との歴史的経緯を抜き出す。  
関係する教科書のページと内容は、

教科書の



次のページには、「問われていること」と、関係する教科書のページと行が記されています。

(2) 当国は小さく、穀物や産物も少ないのです。先の明王朝から現在まで、中国の冊封国となり、代々王位を与えられ属国としての義務を果たしています。福建に朝貢に行くときに、必需品のほかに絹などを買います。朝貢品や中国で売るための輸出品は、当国に隣接している日本のトカラ島で買う以外に入手することはできません。その他に米、薪、鉄鍋、綿、茶などがトカラ島の商人によって日本から運ばれ、当国の黒砂糖、酒、それから福建からの商品と交換されています。もし、貴国と友好通商関係を結べば、トカラ島の商人たちは、日本の法律によって来ることが禁じられます。すると朝貢品を納められず、当国は存続できないのです。



【注目する内容】

- ア 中国から王位を与えられた属国としての義務である朝貢ができなくなる。
- イ 琉球は、黒砂糖を日本の米や茶などと交換をしている。



3 (ア) 琉球王府が隠そうとした国際関係 を (イ) 歴史的経緯 を含めて教科書から抜き出して、120字で要約する。

(PP181. L 7 及び注③～182. L 3 及び注①)



120字に要約する

ここ (P8, 9) からはヒントが書き込まれているシートです。

解いてみましょう (第4講) Bについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア 江戸時代末期に (ア) **琉球王府が隠そうとした国際関係** について書く。

イ (イ) **歴史的経緯** を含めて書く。

ウ 4行 (120字) 以内で書く。

2 教科書から、江戸時代末期までの琉球王国と日本との歴史的経緯を抜き出す。  
関係する教科書のページと内容は、

教科書の **181 ページの7行目及び注③～182 ページの3行目及び注①**



琉球王国は、1609(慶長14)年、薩摩の島津家久の軍に征服され、薩摩藩の支配下に入った。薩摩藩は、琉球にも検地・刀狩をおこなって兵農分離を推し進めて農村支配を確立したうえ、通商交易権も掌握した。さらに、琉球王国の尚氏を石高8万9000石余りの王位につかせ、独立した王国として中国との朝貢貿易を継続させた③。朝貢のための琉球使節は、福建の港から陸路北京に向かった。また琉球は、国王の代わりごとにその就任を感謝する謝恩使を、将軍の代わりごとにそれを奉祝する慶賀使を幕府に派遣した①。このように琉球は、幕府と中国との二重の外交体制を保つことになった。

注③：薩摩藩は琉球産の黒砂糖を上納させたほか、琉球王国と明(のちに清)との朝貢貿易によって得た中国の産物も送らせた。

注①：使節の行列には、異国風の服装・髪型をはじめ、旗・楽器などを用いさせ、あたかも「異国人」としての琉球人が将軍に入貢するようにみせた。

次のページに、考え方が記されています。



(2) 当国は小さく、穀物や産物も少ないのです。先の明王朝から現在まで、中国の冊封国となり、代々王位を与えられ属国としての義務を果たしています。福建に朝貢に行くときに、必需品のほかに絹などを買って求めます。朝貢品や中国で売するための輸出品は、当国に隣接している日本のトカラ島で買う以外に入手することはできません。その他に米、薪、鉄鍋、綿、茶などがトカラ島の商人によって日本から運ばれ、当国の黒砂糖、酒、それから福建からの商品と交換されています。もし、貴国と友好通商関係を結べば、トカラ島の商人たちは、日本の法律によって来ることが禁じられます。すると朝貢品を納められず、当国は存続できないのです。



【注目する内容】

- ア 中国から王位を与えられた属国としての義務である朝貢ができなくなる。
- イ 琉球は、黒砂糖を日本の米や茶などと交換をしている。



3 (ア) 琉球王府が隠そうとした国際関係 を (イ) 歴史的経緯 を含めて教科書から抜き出して、120字で要約する。

琉球王国は、1609(慶長14)年、薩摩の島津家久の軍に征服され、薩摩藩の支配下に入った。薩摩藩は、琉球にも検地・刀狩をおこなって兵農分離を推し進めて農村支配を確立したうえ、通商交易権も掌握した。さらに、琉球王国の尚氏を石高8万9000石余りの王位につかせ、独立した王国として中国との朝貢貿易を継続させた③。朝貢のための琉球使節は、福建の港から陸路北京に向かった。また琉球は、国王の代わりごとにその就任を感謝する謝恩使を、将軍の代わりごとにそれを奉祝する慶賀使を幕府に派遣した①。このように琉球は、幕府と中国との二重の外交体制を保つことになった。

注③：薩摩藩は琉球産の黒砂糖を上納させたほか、琉球王国と明(のちに清)との朝貢貿易によって得た中国の産物も送らせた。

注①：使節の行列には、異国風の服装・髪型をはじめ、旗・楽器などを用いさせ、あたかも「異国人」としての琉球人が将軍に入貢するようにみせた。



120字に要約する

今回、問題を解くことで学んだこと

A large empty rectangular box with a double-line border, intended for the student to write their reflections on solving the problem.